2024年度 ドコモ市民活動団体助成事業 活動成果報告書

2025/9/30

団体名	未来応援コミュニティb-roomぷるーむ	活動タイトル	高校生のためのサードプレイスにつながる地域活動参画プログラムの構築

望ましい社会状況および団体のビジョン（社会的役割と活動基盤）

●地域の望ましい社会状況(ビジョン)	高校生がいきいきと楽しみながら地域で活動する環境であるために「地域活動参画プログラム」を活用し高校生が自発的かつ主体性をもった活動へとつながること。また、高校生が地域活動や事業を通し家庭や学校以外の大人との関りや、同世代間の交流を図ることで活動への意欲や、自己有用感をもつことにつながる。この構築されるプログラムの活用によって居場所をつくるための力を育み、安心したコミュニティの形成ができる地域社会であることが望ましいビジョンである。
●団体の社会的役割(ミッション)	高校生が自主的かつ主体性をもった活動を行うため企画、運営のプログラムの構築を行う。具体的には以下のような取組を促進する。 １，地域交流から広く地域の現状を知り理解する。自分たちの未来や住み続けたいまちを想像し、地域の一員として捉え、安心して考えを意見表明する場をつくる。 企画立案の手法、考え方やスキルを学び、どのようにすれば望ましいかたちで実施（解決）につながるか対話やワークを行う。 ２，構築されたプログラムを活用し、地域活動や事業を企画（既存の地域活動の場合、実施方法は関係者と連携）運営し実施する。実施後はリフレクションを行いプログラムのブラッシュアップを行い構築を促進させパッケージ化を図る。
●団体の活動基盤	●望ましい人的資源：子どもの気持ちに寄り添い安心して過ごせる運営、事務や広報を担える人的資源の確保。卒業した高校生たちが積極的に携わり、高校生のサポートにつながる。パートナーシップや連携の強化を図る。 ●望ましい物的資源：活動を行うスペースや活動に必要な物品の大部分をまかなえるよう地域企業や地域施設の連携体制の構築とパートナーシップ（協力・支援）団体の拡充を図る。 ●望ましい活動資金：持続可能な運営のための自主財源（自主事業、寄付）の確保。 ●望ましい情報：定期的に地域、子どもへのヒアリングを行い課題の情報共有を図っていく。活動で培ったノウハウやスキルをスタッフ同士での情報共有し人材育成強化へつながる。

■活動風景

活動風景①

活動風景②

■活動報告

本事業の核となる成果は、高校生の意識が「やらされ感」から「主体的な参画」へと明確に変容した点にある。

「企画立案ワークショップ」から「Book Day」「高校生カフェ」といった具体的なイベント実施に至る一連のサイクルを経たことで、参加者は企画実現という困難なプロセスを乗り越え、自己肯定感と強い達成感を獲得。意識調査において、参加者の94%が自分や仲間の成長を実感し、イベント後には全員（100%）が地域活動への関心を肯定する結果を得た。
この成功体験は、彼らが「周囲から認められたい」という根源的な欲求（意識調査で100%肯定的）を満たし、学校や家庭以外で自分の強みを発揮できる「サードプレイス」の必要性を強く認識させた。
結果として、活動後のリフレクションでは、自発的に次の改善案や第2弾の企画が提案され、継続的な地域活動への参画意欲が芽生え、具体的な行動へと結実。単なるイベント参加者ではなく、地域課題の解決とコミュニティ形成を担う当事者へと変貌を遂げた。

■1年間の目標に対する達成状況(まとめ)

本事業の主要目標「企画ノウハウの習得」「意見表明力の向上」「地域活動への興味関心」は、活動を通じ極めて高い水準で達成した。意識調査結果は「企画やメッセージを伝えることができた」「達成感を味わえた」といった肯定的回答が多数を占め、目標の定量的指標（参加者の80%以上が2段階以上UP）を大きく上回る成果を創出。
特に、「高校生カフェ」の成功体験は、「企画が実現した達成感と自己有用感」を大幅に向上させた。高校生が自らゼロから企画・完遂した経験は、「周囲の人から認められたい」（意識調査で100%肯定的）という根源的なニーズを満たした。結果、「終わった後は達成感があり、次も挑戦したい」という声が多数寄せられ、自己評価の向上に明確に結びつく。
また、愛媛県との広域連携という難易度の高い目標も達成した。イベント実施後のリフレクションを経て、参加者が第2弾カフェ企画など次のアクションへ主体的に移行した事実は、構築したプログラムの有効性を示す最大の成果となる。地域活動への関心は参加者全員で向上し、活動の継続へと繋がる基盤を確立した。

■事業を通じて得られたノウハウ

本事業は、高校生の主体性と継続的な参画意欲を引き出すための二つの核となるノウハウを確立した。
一つは、「遠隔地連携を成功させるハイブリッド型サポート体制」。愛媛県との連携において、物理的距離の課題に対し、定期的なオンライン会議による企画管理と、現地スタッフ配置や個別相談を組み合わせ。これにより、高校生は挫折することなくプロジェクトを完遂し、遠隔地での協働成功モデルを確立した。マニュアル依存ではなく、プロジェクト完遂という経験を通じた学習が、役割分担やオペレーション効率化といった実践的ノウハウの習得に最も有効であると証明された。
二つ目は、「成功体験を積み重ねる活動サイクルと即時改善のリフレクション手法」。高校生にとって無理なく地域に貢献できる「高校生カフェ」といった企画規模を設定することで、初参加でも小さな成功体験を確実に味わえる環境を整備。さらに、イベント直後のリフレクションでは、「困ったこと（材料の補充不足など）」を失敗ではなく次の企画へ活かすべき改善点としてポジティブに捉え直す手法を導入。このサイクルが高校生の主体性・自発性を損なうことなく、継続的な地域活動への参画意欲を直結させる重要な鍵となった。

■望ましい社会状況を達成するための課題

高校生が自発的かつ主体性をもって活動し、安心したコミュニティを形成する地域社会、すなわち「望ましい社会状況」の達成には、活動の持続性と展開性の確保が最大の課題となる。
アンケート結果は「また開催してほしい」「次も挑戦したい」という高校生の高い継続意欲を示しており、単発イベントで彼らの熱意を終わらせてはならない。成功体験を「家庭や学校以外で自分の強みを生かす場所」としてのサードプレイスに定着させ、イベントベースではなく、運営を高校生自身が担う半常設的な運営体制への昇華が求められる。

また、成功を収めた愛媛県との連携モデルを継続するためには、ボランティアベースの支援から脱却し、遠隔地サポートを恒常的に行えるリソース（予算・人材）の確保が不可欠。
さらに、成功モデルを他の地域や学校へ展開するため、活動内容をパッケージ化し、運営ノウハウを共有する仕組みを確立する必要がある。これら「継続的な活動機会の提供」と「遠隔地サポートの定常化」、そして「成功モデルの横展開」が、より多くの高校生が活動に参画し、地域社会の活性化に繋がるための喫緊の課題となる。

■活動成果のアピールポイント（自由記入）

この1年間の活動を通じて	高校生の主体性の活かせる場こそ「居場所」になること	を達成しました。

■受益者の具体的な変化（自由記入）

高校生は「やらされ感」から「主体性」へと明確に変化しました。特に、企画を完遂したことで自己肯定感と達成感が向上し、継続的な地域活動への意欲が芽生えたことが大きな変化です。